東久留米市

# くるめの文化財

平成３年３月
第７号
東久留米市教育委員会

## 東久留米市新指定文化財（※平成３年２月26日指定）

**石橋供養塔**　有形民俗文化財第26号
小山二丁目（大円寺門前）

石橋供養塔は、橋を造ったり改修した時に、村人や旅人の「道中安全」を願って立てられたものと言われています。

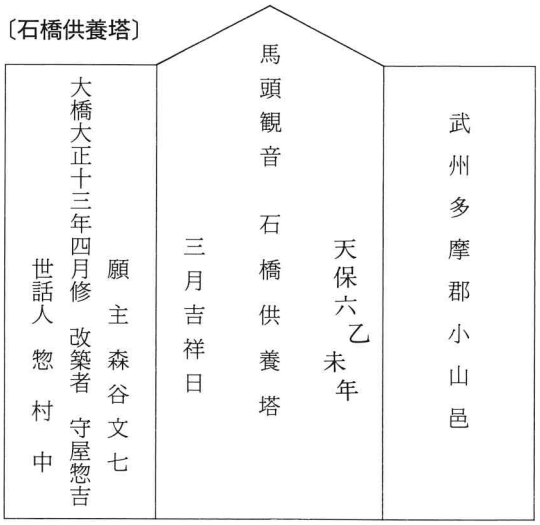
この石橋供養塔は、大円寺前の黒目川に架けられていた石橋のすぐ側にあったものを、昭和四十年代に現在の新大橋に改修した時、今の場所へ移しかえたものだそうです。

高さ108㎝、径31㎝×23㎝の角柱型で、石塔の向って右側面には、「武州多摩郡小山邑」と記されています。正面には、馬の保護神として江戸時代に広く信仰された馬頭観音像が彫られ、その下に「天保六乙未年　三月吉祥日」とあります。馬頭観音は馬頭明王ともいい、八大明王の一つで、宝冠に馬頭をいただき、観音像の中では唯一憤怒の相をなした観音菩薩です。それが馬の供養と結び付いて、江戸時代に庶民の間に信仰普及し、道の辻や街道、橋のたもとなどに供養塔や塚が造られるうち、やがて「道中安全」の願掛けにも用いられるようになったようです。

天保６年石橋供養塔

「天保六」は江戸時代の年号で、天保６年＝1835年、「乙未」は干支で、十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）との組み合わせによる年代の表し方、「吉祥日」は、現在でも　○月吉日　などと使いますが、これは陰陽道（古代中国の陰陽五行説に基づいて天文・暦・数などをあつかう術）に基づくもので、何かをしようとする日が最良の日であるようにとの願掛けの意味があります。

〔石橋供養塔〕

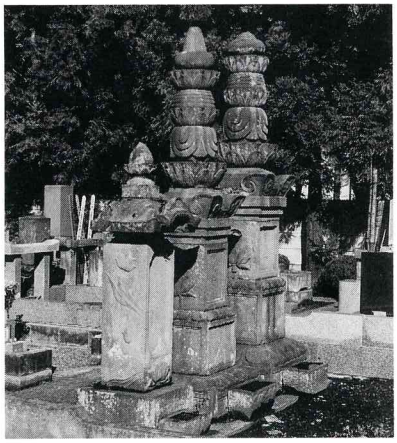



石塔の左側面には、「願主　森谷文七」「大橋大正十三年四月修　改築者　守屋惣吉」「世話人　惣村中」と記されています。あれ？と思ってしまいますが、しかしよく観察すると、「大橋大正……」の文字は、他の天保年間の印刻文字と異なっているのがわかります。おそらく大正13年に橋を改修し、その時に加筆したものなのでしょう。「世話人　惣村中」の「惣」は、もとは室町時代初期にあらわれた、農村の共同体的結合による自治組織のことですが、村民全体の名によって村の意思を表示したり行動したりする場合に使われたようです。

**鈴木家墓地**　史跡第４号

大門町一丁目（浄牧院内）

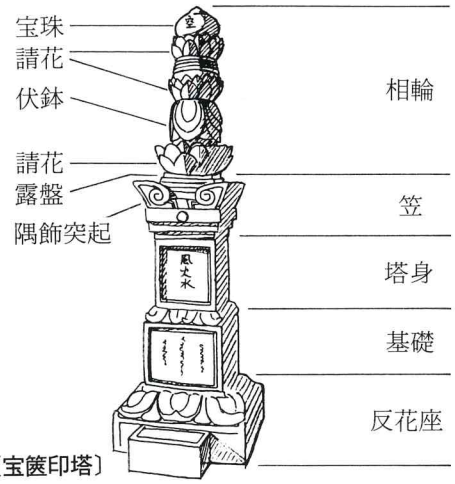
浄牧院内にある徳川幕府の旗本、鈴木家の墓地です。向って右側より鈴木重長、重長の妻、そしてその子鈴木重正と三基の墓碑が並んで現存しています。



徳川幕府旗本鈴木家墓碑

重長とその夫人の墓碑２基は、いずれも宝篋印塔と呼ばれる型で、高さ約3.7mを測る立派なものです。重長の墓碑には、「？翁宗慶居士　元和七辛酉歳　九月朔烏　参州産人武州江戸住源家芳流也　鈴木久兵衛重長」とあります。「？翁宗慶居士」は戒名、「元和七」は江戸時代の年号で、元和７年＝1621年、「辛酉」は干支による年代、「朔烏」については珍しい表現ですが、「朔」は太陰暦で一日を示します。また「烏」は、火・太陽という意味もあり、例えば「烏兎」というと太陽には三本足の烏が住み、月には兎が住むという古代中国の伝説に因み、太陽と月を表すそうです。つまり「九月朔烏」で、９月１日。「参州」は今の愛知県、「参州産人武州江戸住源家芳流也」で、参州生まれの人で、武州（武蔵国）江戸に住み、源氏の流れを汲んでいるということになります。中央の重長夫人の墓碑は、重長のそれよりもやや小振りながら、同形態のもので、慶安二年（1649）の銘文が見られます。

両基ともに宝珠部分に「空」、塔身部に「風火水」の文字が刻まれていることから、密教思想でいうところの万物の基本である「地・水・火・風・空」の五つの要素を石造物化した、いわゆる五輪塔としての意味付けも与えられていることが伺われます。




〔宝篋印塔〕

そして、向かって左側にある笠付角柱型の墓碑が、重長の子鈴木久兵衛尉重正のものです。

東久留米市域に領地のない鈴木家が何故浄牧院を一時的にも菩提時としたのかは不明です。

『寛政重修諸家譜』によると、鈴木重長は、鈴木與九郎重勝の三男で、又の名を重信、久七郎・久三郎、そして久兵衛重長と名乗り、徳川家康につかえて大番に列し、廩米二百五十俵を賜り、大阪再度の戦に参加し、60歳で死亡とあり、また、その妻は、織田家の臣建部茂兵衛某が女と記されています。

同じく同書によると、鈴木重正は、久三郎、久兵衛重正といい、元和七年11歳で父の名跡を継ぎ、のち加増されて廩米から采地にあらためられ、下野國河内郡に四百五十石を地行し、寛永十九年より御蔵奉行となり、萬治三年五月十七日、五十歳で没したとあります。おそらく久三郎は幼名、久兵衛重正の久兵衛は元服名、そして重正が実名ということでしょう。当時の元服、つまり男子の成人式は、だいたい12～15才頃行い、前髪を剃り落とし、衣服の袖を短くつめたそうです。11歳で父の名跡を継いだ元和七年は、父重長が死亡した年と一致します。廩米というのは、俸禄米（蔵米）のこと、采地は、年貢収納権を与えられた知行地のことです。

# 江戸時代の草津温泉

## 小山村郷右衛門親子の草津入湯日記

『東久留米史史料』(310頁～315頁より)

旧小山村の古文書に、『小山村郷右衛門草津入湯日記帳』というのがあります。これは、嘉永五年（1852）六月に、小山村の郷右衛門とその母が、上野国（群馬県）の草津温泉へ湯治旅行に行った時の記録です。

『小山村郷右衛門草津入湯日記帳』は、日付ごとに買ったものの値段と品物名、その日の宿泊地のみを羅列した簡単なもので、旅行中の情景やエピソードについては一切わかりませんが、どの道を利用して、何日に何処へ泊まり、草津に何日逗留したかはほぼ追うことができます。以下、その要約について紹介します。

まず嘉永五年六月の日付があり、子六月十六日から始まります。

子六月十六日　城村
一百文　たき
かし代遣
同日　川越
一七拾六文　中喰
同日　同所
一九拾弐文　手掛
同日　井草渡
一八文　橋代
同日　小休
一拾弐文　茶代
かし代
一拾弐文　松山稲荷
子六月十六日　参銭
一四文　松山こうや
同日　泊り
一弐百参拾弐文

以上のような調子で、草津まで続くわけです。

以下、細かい買い物部分は除き、主にその経路を追うかたちで抜き書きしてみました。

十七日　神岡かん音…荒川…熊ヶ谷宿…ふかや宿（中喰）…本庄宿泊

十八日　高崎宿…かんな川舟渡し…いかほ泊

十九日　五町田…中の条宿…沢渡泊

廿日　なます…峠

と進み、草津に到着しています。

当時、本庄宿で武蔵国はおわります。現在の埼玉県と群馬県の県境を流れる神流川は当時急流で知られ、渡舟は、川に綱を渡しておいて、その綱を繰って行っていたといいます。

板橋に発する中山道は大宮・熊谷・高崎と続き、高崎から先は安中、碓氷峠方面へと西へ向かいますが、郷右衛門は越後へ通ずる三国街道を北へとり、さらに渋川からは伊香保・中之条方面へと道を分けて進んでいます。峠というのは暮坂峠のことです。草津へ入る道は東・南・西それぞれにいく筋かありますが、この暮坂峠のコースは、他の険しい峠道に比べて、馬も籠も自由であったそうで、比較的通りやすかったのかもしれません。峠を越えると草津です。

草津に着いてからの日記は、「草津町小遣」として買った物とその値段を羅列してあります。

それによると、宮崎文右衛門の宿（注１）におよそ二週間泊り、七月五日に帰路についています。滞在中は、あま酒、しんこ、たまご、蕎麦、ゑまさか餅などを買い、柏屋、さいのかわら・地蔵道、桐屋等の名が記されています。

さて小山村の郷右衛門親子が行った当時の草津温泉の様子はどういうものだったのでしょう。

## 文献にみる草津の湯

江戸の国学者堀秀成の『草津繁盛日記』によると、客部屋を草津では「壺」と呼んでいる。その壺ごとに炊事場、水桶、水流し、竈などが据え付けられている。客は宿に着くと、番頭に決められた壺に入り、そこで**自炊**しながら人それぞれの湯治生活を始める。浴槽は野天の小屋で、見物人の見ている前で男女混浴が普通である。草津の湯はイオウが強く熱い（最高温度は70度を越える)。特に「熱の湯」は非常に熱く、普通は手も入れられないが、重い病に苦しむ入浴者の多くは病気を治すか死ぬか、いわば命懸けで、叫び、怒鳴り、または手拭を口にくわえたりして我慢して入る。少しの湯の動きも身体に応えるため、出入りは皆一緒。この湯に入る人は肌が真っ赤である。また湯に入る人は、い

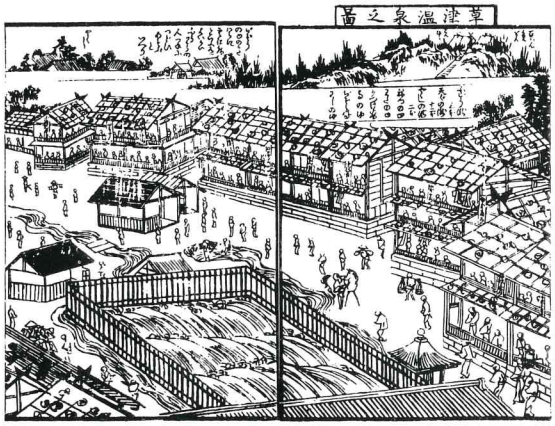
きなり入ると目が眩んだりするため、柄杓を一本づつ持って頭の頂に幾度も湯をかけてから入る。湯の脇には腰掛けを並べた休み場があり、世話をしてくれる女がいる。『草津繁盛日記』は以上のように記録しています。

“草津よいとこ一度はおいで……”や“お医者さまでも草津の湯でも……”などとして、多くの人に知られる草津温泉は、『東海道中膝栗毛』で有名な江戸時代後期の代表的な戯作者、十返舎一九の滑稽本街道シリーズでもとりあげられています。

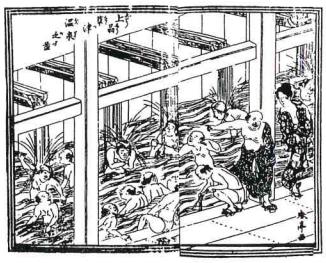
その一九の『草津道中膝栗毛』の一節を要約してみると、……弥次郎兵衛、きた八も今日湯宿について壺ひと間を借りきって休息しているところへ宿の番頭が、さらしの越中ふんどしと柄杓、自炊に必要な所帯道具を記入する通い帳をもってきた。それを手に二人がワイワイやっていると、そこへ男どもが膳、椀、鍋、やかん、すりばち、その外薪、油など一切所帯まわりのものを運び、水もくみ入れて行く。

二人が炊事にかかろうとすると、そばや、もちや、とうふやなどなど、廊下を売り歩く商人が、それぞれに声をあげながらやってくる……。

さらに原文調でいくと、「そとは夜に入れども、往来の人あししげく、唄浄瑠璃やら、いたこ新内、麦つきうたもとりまぜて、按摩の笛、そばうりの声、ひきもきらず、座敷　々には三味線のふと賑しきも、次第に更けわたりて、後には鼾の声の寝耳にひびき……」といった夜の草津であったという調子です。

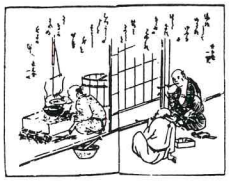


草津温泉の図（草津温泉史話より）


滝の湯『草津道中膝栗毛』

さらに京都の儒者平沢旭山（1780年8月入湯）によると、二百余の家が湯の渓の中に軒を連ね、家が輪のようになっていて、その真ん中に湯の池があり、そこから大川のように湯が流れ出している。すぐ前の浴槽に流れを引いて大小十五の湯滝を作っている。高いものは二十尺、低いので十何尺、患者はめいめい患部をうたせている。浴槽にはいつも数十人が入っている。

今一つ、名古屋の琴橋堂巣雀子という人の宝暦五年（1755）の湯治記、『草津薬泉之記』によると、六月土用以降は畳数より多く人が入るので、その部屋での炊事はたいへんだ。さしたる病気のない者でも、涼みがてらに遊びに来ているようだ。入る湯は病気によって区別があり、諸病によいという滝の湯などは、数時間待つ。衣類は古いもののほうがよい。破れたものでも見苦しいということはない。夜具には虱が山ほどいて汚らわしい。などなど、細かく紹介したものもあります。


壺での自炊風景の図

こうして小山村郷右衛門親子は、嘉永五年（1852）に、片道4泊5日、草津滞在2週間、およそ25日をかけて湯治旅行を行ったのです。

（注1）宮崎文右衛門の宿は、現白根神社側の弁当屋「まつみ」の場所であることなど種々清瀬博物館学芸員の内田祐治氏にご教示いただいた。

◎文化財に対するお問い合わせは
市役所　73-5111　内線343
社会教育課　文化財担当まで
〈編　　集〉
東久留米市教育委員会社会教育部社会教育課
〒203　東久留米市幸町3-11-10